PA-044

褥瘡をもったまま退院となった患者・家族への退院支援

福井赤十字病院　看護部
○大濱（おおはま）　有加（ゆか）、高島　恵、内田　一美

【はじめに】A 氏は、入院直前発生の褥瘡があり、その褥瘡は治癒しないままに自宅へ退院となった。この事例から褥瘡をもって在宅療養になる患者に必要な支援を明らかにする。
【事例紹介】A 氏 60 歳代の女性。子宮肉腫の手術のため入院。息子夫婦と同居しているが、息子の妻とは不仲であり、介護者は息子のみ。かつては看護師で就労。下半身麻痺があり、車椅子生活。入院 1 週間前から倦怠感のため臥床時間が長くなり、仙骨部に褥瘡発生 (4 × 4cm、黒色期)。
【経過と看護の実際】1. 退院先の決定：入院日に、A 氏と息子ともに退院先は自宅、との意向を確認。2.ADL 拡大への支援：車椅子だが身の回りのことは自立していた入院前の生活に戻れるように、術後 1 日目からリハビリ開始。自宅での移乗用具などを持参してもらってリハビリを行い、ADL の拡大を図った。車椅子移乗時のズレ防止の指導を PT とともに行った。3. 栄養状態の改善：NST の介入を得て、本人の嗜好を取り入れ、不足する栄養分を補う食事とし、入院時低値であったデータの改善をみた。4. 褥瘡部の皮膚ケア：皮膚科医、WOC 看護師ともに褥瘡部の皮膚ケアを行い、褥瘡は縮小。浸出液があり、自宅でのケア方法を息子に指導。現在の大きさや状態を記載した資料を渡し、悪化傾向があればすぐに連絡・受診するように説明した。事情があり、訪問看護を受けることは拒否。5. 退院後：息子は褥瘡の悪化に気づき、受診を勧めたが、A 氏は受け入れず、退院 2 週間後に受診時には褥瘡が悪化していた。
【考察】入院時から自宅退院を目指して、自宅での状況を想定しながら支援をすることができた。褥瘡に対する栄養改善や皮膚ケアなど集約的介入により改善を見た。しかし、退院後に早期に受診しなかったことについては、息子のみでなく、本人の理解を深める関わりが必要であった。

PA-045

参加型を取り入れたマザークラス 1 期の評価

大津赤十字病院　産婦人科
○野田（のだ）　彩加（あやか）、寺田　桂子、高田　香織、野口　奈穂、
岡本　美佐江

1はじめに当院におけるマザークラス1期は妊娠経過に沿って母体、胎児の変化を説明している。今までは講義形式であったが、参加者が楽しく主体的に妊娠経過を理解し母親役割獲得の手助けとなるよう、参加型の内容に変更した。変更内容、マザークラスの参加者に実施したアンケート結果を報告する。
2 研究方法調査期間：平成 25 年 9 月～平成 26 年 1 月対象：当院で妊婦健診を受け､マザークラス 1 期を受講した妊婦､36 名にアンケート調査量的データを記述統計により分析し、自由記載は類似した内容を分類した。
3 倫理的配慮個人が特定されないよう配慮し、研究目的以外に使用しないことを説明し、アンケートの実施をもって承諾と見なした。当院看護部倫理委員会の承認を得た。
4 結果アンケート回収率 100％（36 人）「妊娠の経過が理解できたか」に対して 100％の妊婦が理解できたと答え、「受講をして妊娠に対するイメージは変わったか」に対して、「変わった」と答えた妊婦は 54％であった。その他自由記載では、参加者同士の交流が良かったという感想が 61％であった。
5 考察　妊娠経過を理解するにあたり、胎児模型を使用したことで、経過に応じた胎児をよりイメージしやすくなり、さらなる児への愛着形成にもつながったと考える。同じ立場同士で、気持ちの共感や経験談を聞きながら学べたことが、不安の軽減にもつながった。さらに妊娠を前向きに捉えることができ、母親役割獲得への過程の一助になったのではないかと考える。
6 結論　参加型のマザークラスに変更したことで、自主的に楽しみながら妊娠期の母体や胎児の変化を理解することができ、母親役割獲得へ繋がったといえる。

PA-046

妊婦の心の変化に見るマタニティヨーガ教室の評価 ～自己効力感尺度を用いて～

静岡赤十字病院　産科
○正木（まさき）　育未（いくみ）、松井　香織、梅原　実希子

近年の出産年齢の高齢化、ハイリスク分娩が増加する中、分娩時異常に移行せず、安全に満足のいくお産をしてもらう為には妊娠期から心身共に健康に過ごすことが重要である。マタニティヨーガは運動習慣のない妊婦でも安全に運動ができ、また自分の内面や心の奥深い部分に触れ、胎児と向き合う貴重な時間を作り、自己管理意識を高めるのに効果的である。　そこで、当院でも 2013 年 7 月よりマタニティヨーガ教室を開設した。当院では、毎月第 4 木曜日に 2 回開催しており、定員は 15 名である。その中で妊婦より、マタニティヨーガ体験後は身体の心地良さを実感している発言が多く聞かれた。また、マタニティヨーガ教室に通う回数が多くなるほど身体も心も上手にコントロールしているように感じた。今回マタニティヨーガ教室の評価のため、教室受講前後での分娩に対する心の変化を亀田らの自己効力感尺度を用いて調査し、検討したのでここに報告する。

PA-047

産科病棟における妊婦の口腔衛生に関する現状調査

盛岡赤十字病院　看護部ＮＳＴリンクナース会 [1)]、ＮＳＴ [2)]
○笠原（かさはら）　里香（りか）[1)]、佐々木　恵 [1)]、伊藤　敏子 [1)]、鈴木　聖子 [2)]、
旭　博史 [2)]

【はじめに】産科棟スタッフとして NST リンクナース会に参加し、妊産婦の口腔ケアには予防的なかかわりが重要であることを学んだ。そこで妊産婦の歯科・口腔衛生に取り組む上で、産科棟スタッフがどのように妊婦の口腔衛生に関わっているか現状把握が必要であると考え調査を行った。
【研究方法】2014 年 2 月 1 日～ 15 日に産科棟スタッフ４２人を対象に１）妊婦の口腔歯科衛生について認識している内容２）外来保健指導中や病棟入院患者から口腔歯科衛生について質問相談を受けたことの有無とその内容３）外来保健指導時の口腔歯科衛生に関する説明の有無とその内容を質問紙留め置き法で調査した。
【結果】42 名中 28 名より回答を得た（回収率 67％）１．妊婦の口腔歯科衛生について認識している内容：虫歯や歯周病の悪化、切迫早産の原因になりうることがあるため、安定期になったら歯科受診を勧める。妊娠初期は、つわりによって歯磨きができず口腔内が汚染しやすい。エストロゲンの影響で歯茎が充血し、出血しやすい。
２．妊産婦からの相談内容は、入院中の方から「虫歯が悪化している」「差し歯がとれた」「歯のつめ物がとれた」と言われた、歯科治療をしてよいか否か、妊娠中の抜歯などであった。
３．外来保健指導時の口腔歯科衛生に関する説明内容：悪阻のときは口腔内が不潔になりやすく、虫歯にもなりやすい、歯科治療・検診時期は１７～３０Ｗにすること、などであった。
【考察】当院産科病棟での１年間の総分娩数９８７件のうち母親学級１課の受講者は８８名（参加率８．９％）と低い。しかし、外来では妊婦健診者全例に初期指導が入っているので、外来での初期指導にスタッフの側が意識して指導することが口腔衛生に関する知識の普及・啓発につながると考える。